

# 五島美代子 昭和戦時下における〈母の歌〉

## ——第二歌集『丘の上』をめぐる——

濱田美枝子

〔要旨〕文学史上「母の歌人」、「母性愛の歌人」と冠される歌人五島美代子（一九八〇—一九七八）の戦時下における〈母の歌〉の内実は、けっして、戦意高揚のための母という役割のものでも、「母性愛は母の子に対する本能的なもの」と捉える母性愛神話的なものでもない。

美代子は国家や民族を超えて無辜の生命を脅かす戦争への懷疑の歌を世に出した。また、〈報国の徒〉として振る舞う娘を評価し、擬似的に「軍国の母」たろうとする「男の子」を持たぬ戦時下の母の屈折した心情がより娘への密着感へと傾斜していった。〈母と娘〉は、〈戦時下の母〉と〈報国の徒〉という立場で交差し、互いに自立の機会を得たかに見えたが、娘から分離できない母は、自己の内部の葛藤を処理しきれず、無意識のうちに再び娘に依存することとなった。戦時下という異常な時世が心身に拍車をかけて複雑化した心情を浮き彫りにしたのが、戦時下ゆえに顕在化した美代子の戦時下の〈母の歌〉の特色である。

戦時下における美代子の歌には、晩香女学校校長としての責務などの（公）的意識と〈私〉的心情という二重構造の狭間で揺れ動く心を抱えながら、その二律背反的葛藤の精神世界をそのまま表現した歌人の強い意志が働いている。美代子は、言論が統制された時代にあつてこそ、やむにやまれぬ内奥の声を真摯に歌にした歌人であつた。その根底には戦争への懷疑や怯えを直観するだけの感受性があり、それが時流を超えた普遍的な歌をも生み出すことができたのではなからうか。近代社会の先陣を切つて生きようとする母の

自我の強さは、娘を支配し、娘が自立を果たそうとすると自分からの分離を拒み、激しい葛藤を抱え持つ歌群を表出した。時代の先端を拓こうと格闘するなかで、社会規範に抵抗すべきエネルギーの方向は時に内に向き、娘を〈母と娘〉の連鎖の中に取り込んでしまおうとした。この関係が戦時下という非常時の生活体験をくぐることによってより明瞭になった。近代の母性愛では覆いきれない美代子の内奥の声の表出が持つ意義は大きい。それゆえ時代を超えて美代子の〈母の歌〉は評価されるべき歌群であると言い得る。

〔キーワード〕：五島美代子、『丘の上』、『立春』、戦時下の〈母の歌〉、〈母と娘〉

## はじめに

文学史上「母の歌人」、「母性愛の歌人」と冠される歌人五島美代子（明治三一—昭和五三）は、第一歌集『暖流』（三省堂、昭和一一・七）刊行の後、昭和二三年四月、第二歌集『丘の上』（弘文社）を刊行した。昭和十一年から昭和二十一年の昭和戦時下一〇年間に亘る歌を集めた『丘の上』は年次順で編まれ、長歌二首、短歌五二五首から成る。『丘の上』

が出版されたのは第二次世界大戦後であるが、所収の作品群は一五年に亘る戦時期と重なるものであり、それに新時代に希望を繋ぐ昭和二年の歌までを入れて構成されている。<sup>①</sup>『丘の上』には、二人の娘のことを詠んだ〈母の歌〉や、戦場に征く人々や自らが校長であった晩香女学校の生徒たちへの思い（台湾や朝鮮からの留学生たちもいた）など、また、桜などの自然に託して戦時下の微妙な心の變を詠ったもの及び敗戦を迎えての心情を詠んだ「屈辱は苦く冷めたく初味の鮮らしくさへ身に沁みわたる」や「触るるものはふれしめよ一挙に突き破り割れて現れ来んの待ち遠し」などが掲載されている。

本稿では、この『丘の上』所収の歌に見られる、日中戦争からアジア太平洋戦争に及ぶ昭和戦時下における五島美代子の〈母の歌〉について次の点に注目し検討する。

美代子は二人の娘の母であった。母という存在が国家権力の発揚と護持とにあった昭和戦時下にあつて母の役割は男子を生み育てることにあつたが、男子を持たない美代子はどのような社会的精神的軋轢の中を生き、二人の娘、特に、成長する十代の娘ひとみに対して〈母と子〉という存在をどのように受け止めていたのであろうか。その深部に潜むものについて考察することによって、戦時下における五島美代子の〈母の歌〉の内実を明らかにすることを目的とする。なぜなら、〈母と娘〉には平常時では顕在化しないような問題が歌を通して立ち上つてくると考えるからである。

（昭和戦時下においての時勢・家族の動態を明示するため年譜を私に作成し最後に掲げた。なお、和暦での表記が戦時下の時勢との関係をより鮮明にすると考え、本稿は和暦で表記することとした。）

冒頭で述べたように美代子は文学史上「母の歌人」、「母性愛の歌人」という表現を冠して論じられることが多い。それは、第一歌集『暖流』に「胎動」と題する十五首を載せたことに始まり、昭和二五年、急逝した長女ひとみへの痛切な想いの歌群を収めた『母の歌集』（立春短歌会、昭和二八・七）や『新輯 母の歌集』（白玉書房、昭和三二・九）を刊行したことによる。

川田順は、『暖流』の序に次の歌を含む一七首を挙げ、「此処には、初めて胎動が歌はれてゐる」・「母性愛の歌によつて、前人未踏の地へ健やかに第一歩を踏み入れた。」（跋）と述べた。

胎動のおほにしづけきあしたかな吾子の思ひもやすけかるらし  
生きむとする吾子の思にひた向ひかしこみ朝の胎動をさく

歌から漂うおどかさや我が子の生命を慎んで受け止めている実感の確かさなどについては、川田の辞は美代子の歌の特徴の一面を言い当てている。

小山静子によれば、良妻賢母思想成立時（明治三〇年代）に女と子ども育児・教育とを結びつけるものとしてすでに母親の愛情の深さが指摘されていたが、〈母性〉が日本で大正中頃から使われ昭和期に定着するに至り、子育ての際の母の犠牲や愛情を先天的に女に備わったものとして「母心」や「母性の喜び」とみなしたという。<sup>②</sup>この近代の母性愛観を前提として美代子の〈母の歌〉は受容されてきた。

美代子に対する評論は、発刊後すぐに『暖流』批評集（『心の花』

竹柏会出版部昭和十一年一〇月）が編まれ、新村出や本位田祥男をはじめ後井嘉一や花田比露思等が近代の新しい「母性愛」の道を拓いたと評価したが、この時点では評論や論文の出現には至っていない。美代子に対する評論は、戦後、長女の自死を経ての『母の歌集』出版以後盛んになった。窪田章一郎は、「執ねく自己表現をしている」が、「娘の思いを汲み取って詠もうとした歌がない」（『五島美代子論』『短歌』昭和二十九年四月）と表現し、佐佐木治綱は「母としての敬虔な観念」が「作者の主観的な感情の上へのみ詠まれている」（『五島美代子』『短歌』昭和二十九年十二月）点を指摘した。また、上田三四二も「母性のエゴイズムの底をのぞかせている」（『五島美代子』『短歌研究』昭和三十一年二月）と論じた。これらは近代の母性愛観を前提として、エゴイズムの観点から美代子の〈母性愛〉に疑問を呈したものが主流である。これらの論が発表されたのは前衛短歌台頭、隆盛の時期で、近代短歌の見直しと超克が求められていた。この、戦中戦後の評価の変容は、母という存在の意味が時代の要請と共に流動することを意味している。

では、〈戦時中の母〉の評価は具体的にどのような価値観に依ったのだろうか。昭和七年三月の「大阪国防婦人会」発会に端を発し、銃後を守る女性たちへの美化、母性賞揚が国策によって押し進められ、昭和十三年四月には「国家総動員法」の発令により、女性は人的資源として国家の人口増に加担すべく役割を担わされた。例えば昭和十六年一月二三日には、「産めよ増やせよ」をスローガンに掲げる人口政策が政府閣議で決定した。また、真珠湾攻撃において戦死した岩佐直治海軍大尉（戦死後海軍中佐）等九名が昭和十七年三月六日、海軍省の発表により軍神とされたが、「九軍神」とその母を題材とした『軍神の母』<sup>⑥</sup>などが刊行され、その母を英雄として称賛した。さらに、同年五月には、「日

本文学報国会」が、四九名の無名の「日本の母」を顕彰し、このことが「読売新聞」誌上に掲載（昭和十七年九月九日～一〇月三十一日）された。彼女たちは、国のため、家のため、子供のために献身する女性であり、夫や子供を毅然として戦場に送りだし、その死に直面しても取り乱すことなく受け止める典型的な「軍国の母」として描かれている。戦時下における母は、国家に我が子を差し出すべく産み育て、我が子の死すら、天皇に奉じたとして受け止めねばならなかったのである。当時はこの銃後の母としての使命感が強い潮流となっていた特殊な時代である。

歌壇においては、歌人たちは昭和十七年六月「日本文学報国会」の結成によってその一部会である「短歌部会」に所属し、国家主義・軍国主義讃美の枠組みの中で活動していたが、アジア太平洋戦争開戦を機にそれまで時流に問う姿勢を持ち続けてきた歌人たちも戦意高揚の方向性を鮮明にした。

## 二

美代子は大正四年九月に佐佐木信綱の門下生となったが、昭和三年、『心の花』を脱退、新興短歌運動を経て昭和四年、「プロレタリア歌人同盟」への参加と脱退を経験し短歌活動から退いた。同年、夫石樽茂（明治三三～平成一五、後の五島茂）も歌壇と訣別した。ロバート・オーウェンを中心とする一八、九世紀のイギリス社会経済史の研究者であった茂は、昭和初期の短歌革新運動の道筋を拓くという役割を担ったが、茂の目指す社会性の導入による短歌の芸術革新の志は、短歌を通して階級闘争を目指していたプロレタリア歌人たちの勢いに敗れた。その後、夫婦は昭和六年から昭和八年まで長女ひとみを連れてイギリスを主とする滞

欧生活を送ったが、帰朝後、大阪に居住し、昭和十三年七月、短歌雑誌『立春』を創刊（平成一〇年二月、茂九八歳の時に五六二号を以て終刊）して、再び歌を通して社会参加を試みた。

この『立春』は、戦時中の美代子の作歌への姿勢がつぶさに見てとれる歌集である『丘の上』に所収した作品の発表媒体となった。のみならず、短歌史としては、日中戦争勃発後からアジア太平洋戦争、そして、敗戦という未曾有の日本の激動の時期の歴史を刻む貴重な歌誌の一つである。『立春』という名称は、茂が編纂した木下利玄最後の自選歌集『立春』（改造社、大正一四・一）の題名から採ったものである。利玄の芸術性に私淑する茂が、利玄の『立春』の語感の持つ油然たる出発感を愛しつつわれわれは自らの道を踏みかためる。（中略）利玄は一つの扉だ。扉のむかうに道は輝いている」（『編集言』『立春』創刊号昭和一三・七）という決意を込めて付けたものである。茂は同「編集言」で、『立春』は芸術道場であり同時に「歌壇の前進指標だ。現歌壇から明日の歌壇への巡回基軸だ」と述べた。また、創刊について、第二歌集『海図』<sup>7</sup>「後記」で「国家理念と民族意識は熾烈に内に燃え、ありし日の流行思想は完く払拭されつくした」と述べ、戦争短歌の性格と前進性を強調し、国家理念との総合を以て貫徹す、として短歌作品による積極的国策参加を掲げた。創立同人は二〇名であるが、創刊号への出詠者は一二〇人を超えた（『立春創刊記念茶話会記事』『立春』第二号（昭和一三・九））。

このように、『立春』は国策に沿った理念を掲げ、戦意高揚の役割を担ったが、その背景には、戦時下で国家が思想、情報の一元化を強要するという特殊な状況があった。しかし、内的理由として、白色人種以外を野蛮人とみる強烈な有色人種への偏見を突き付けられた異国での体験が大きく影響し、日本人としてのアイデンティティや誇りを意識せざるを得

なかった点が大いと言える。

白き皮膚身を包みゐる誇もてあしらふ如く人を見しまみおぼえをり  
有色人種にも頭脳あることをいぶかしむ如く或る時われを見し碧眼  
を忘れず  
『短歌研究』第八巻二号（昭和一四・二）

これは「事変下年頭」と題する美代子の歌群の一首であるが、「一月五日は、昔異郷に逝きしわが伯父の命日なり」との詞書がある。かつてアメリカに居住し異土に埋葬された伯父が異国で味わったという東洋人ゆえの苦悩に思いを馳せる中で、白人優位の意識に立つ西洋人が示した屈辱的な対応についての自身の体験を回想して詠んでいる。前者は上の句で白人である人物の誇りが「身を包みゐる」「白き皮膚」に依ることを詠い、下の句でその人物が異なった皮膚の色をもつ東洋人である自分に「あしらふ如く人を見しまみ」を向けたことを詠んでいる。向けられた自分は、人間の尊厳はそれを包む皮膚の色とは関わりないはずであるのに、という思いからずっと蔑視の「まみ」を「おぼえ」ているのである。後者にも、有色人種を同じ人間とは認めていない白人が美代子に持った衝撃を見逃さない鋭敏さが表れている。両者に共通するのは「おぼえをり」・「忘れず」という表現に籠められているように白人のいわれなき人種蔑視に対しての屈辱感を持続させている点である。このような人から受けた心的苦痛、在外人の疎外感という個人的経験は、五島夫妻が昭和戦時下における国威発揚の要請に加担することになる要因の一つとなったと言える。だが一方では、次章で指摘するが、私情を表すに非常に困難な時代の潮流を、無自覚には受け止められない心情も吐露している。ここに五島夫妻にとつての『立春』刊行の意味の一つがあるのでは



なかるうか。

### 三

『丘の上』は、戦争の拡大という政治的社会的枠組みの中で歌人たちが軍国主義に同調していった年月と重なる時期の歌が主である。しかし、『母と娘』の関係には、時代の要請というだけでは単純化できない問題が内在している。美代子は既に『暖流』において、母は本能的に子への愛に満ちている存在であるという視点ばかりでは理解しがたい捉えどころのない寂しさや複雑な揺らぎを抱えて、自己の内面における無意識の混乱や苦悩をも表現した。かつて、個を重視する精神のもとに我が娘の教育を試みる「育む母」の側面と娘を専有化しようとする抑圧的・呪縛的な「呑みこむ母」の側面とを持つ母千代槌と、娘美代子との〈母と娘〉の關係が姿を変えて、戦時下の美代子とひとみとの關係の基底に継承されていることが窺える。

近藤芳美は昭和二三年、『丘の上』について「僕は、『丘の上』を一つの愛情の生歴史として読む<sup>⑩</sup>」と述べ、「作者の愛情はほとんど自らの肉の一片に打ち込んだやうな愛児への愛情から、やうやく一個の人格となり、『女性』として『母』に切り返して来る成長した『娘』への何か不安な切ない愛情に遷移して行く」と記している。ここには娘の成長を通して変遷するひとりの女性のありのままの姿に注目する視点が提示されている。

昭和一二年、次女いづみが誕生した。『丘の上』所収の次の歌（以後、掲載誌名のない歌は『丘の上』所収のものである）は「支那事変勃発」

と題する五首中の二首であるが、ここには日中戦争開戦という不穏な社会状況とは無縁な満ち足りた母の世界が広がっている。

授乳の時間待ちかねていただきとる児のやはら身は手にはずみつつ

丸肥えし乳児が手足のくびれをかぞへ知りて母は朝毎洗ふ

新生児を抱く多くの人が経験するであろう新しい生命を慈しむ我が子との日常のひとつこまを掬い取り歌にしている。前者では柔らかない赤子の肉体を抱き取った時の感動が詠まれている。「つつ」と、詠嘆の接続助詞を用いることで繰り返しはずんでいるように感じられる肉体を通して新しい生命の躍動感を感じ取り、それが母の心の弾みに呼応していることを表現している。後者は、赤子のはち切れそうな皮膚の「くびれ」に注目している。赤子のくびれに象徴される健やかさが主題として時代の暗さの中で光を放つ。ここには至福と言える穏やかな〈母と娘〉の時空がある。

しかし、同じ「支那事変勃発」と題するなかに、次の歌が見られる。

乳呑児と百日こもれば小刀の刃にもおびゆるころとなれり

子の成長過程で赤子が自分で歩み始めようとする頃、赤子を取り巻く環境の危険に敏感になる母の心を切り取って詠んでいるが、小刀という日常の物が、戦争で敵・味方が刃を交わすことを連想させる。健やかな我が子の命を見つめてきた母にとって、生きるには厳しい戦時下という現実、我が子の命をも脅かす戦争に対する怯えが「小刀の刃」によって引き出されていると言えまいか。しかもこの気持ちはただ我が子のみな

らず、異国の子供へと繋がっていることが次の歌に表れている。

空襲におびゆる眸<sup>ひとみ</sup>近々と見る如く思ふ金髪の子らを

『立春』第四号（昭和一五・六）

右の歌は「空襲におびゆる眸」をクローズ・アップさせ、無垢な魂が理不尽な戦禍に巻き込まれていく子供たちを慮っている。この主題と、「金髪」という色彩を用いた表現は、戦時下にあつては異質と言える。この歌が日独防共協定後、第二次世界大戦開始の翌年に詠まれていることを考えると、その意味は深い。押し寄せてくる戦争の足音を背景に、戦争で傷つくのは無抵抗の乳呑児であり、幼児である。無辜の生命を脅かすのが戦争であるだけに、我が子や国家や民族という意識を超えて普遍的な人間性への覚醒を促すものである。ここに、建前では掘り起こすことのできない心情を掬い上げている。

これらを鑑みるに、美代子は無自覚に国策に則って創作している歌人とは言い難い。むしろ、内面の揺らぎを顕在化させ、戦争への疑念をも表現している点を見落としてはならない。

次に戦時下で幼子を抱えながら晩香女学校の校長という公的立場に立つことになった美代子からどのような歌が生まれたのかに注目したい。

帰国後大阪在住であった美代子は、歌人であると同時に、心臓病で危篤状態を繰り返す晩香女学校（東京）校長の母千代槌の看病や講師の役割など学校教育の一端を担い、大阪と東京との間を行き来する生活を繰り返していた。しかし、昭和一八年三月に千代槌が死去した後は茂とひとみを大阪に残し、次女いづみを連れて校長として晩香女学校に移り住

んだ。茂は同年七月に大阪商科大学を辞して上京し、校主として美代子を支える側に回った。当時、約一〇〇〇坪の土地に建てられた杉並区堀ノ内の学校で、生徒は皆寄宿していた。茂によると「校舎は非常に荒廃していて学校の経営も大変苦しかった」という。美代子は校舎内で生徒たちと寝起きを共にしながら、修身・礼法・国語の教師として、校長として生徒たちの教育と生命を守る責任を負い、母の残した負債を抱えて出発した。「松風」と題する次の歌は、「母亡き後を承けて済美が丘<sup>①</sup>の老松の下荒れたる校舎に棲みつかとす」との詞書がある。

をとめらが掃きよせて来し枯松葉この日の飯をゆたに炊きぬ

松の葉は松の匂ひすかへる手は楓のにほひすかまどくべつつ

昭和一六年四月には米の配給制が始まったが、戦争の長期化に伴う米不足からイモや大豆、乾麺などの代用食を手に入れるのにも困難な時代であった。そういう時代に、具体的に生徒たちの食料を調達し食べさせる苦労も余儀なくされた。右の歌はそのような状況の中で詠まれたものと見て取れるが、にもかかわらず、一首目の上の句には「をとめらが掃きよせて来し」ゆえにそこはかといひ慎ましさが漂い、下の句の「ゆたに」というゆったりとした落ち着きを表す語によって全体が物語であるかのような色調を帯びている。二首目は、まさに戦時中の物資不足の中で工夫している民の生活という現実を匂いで表現している。これらの二首はおっとりとした詩情に包まれてはいるが、生徒たちの戦時下での厳しい生活の一端が具体的に表現されている歌である。

また、昭和一九年には「教へ子と子」と題して五首取り上げている。茂<sup>②</sup>によると、当時警報が鳴ると美代子自らが生徒たちを引率して学校の

近くにあった「陸軍運輸部隊の駐屯地」内の「防空壕」に待避させた。また学徒勤労動員により生徒たちは「荻窪の飛行機部品を作る工場に動員され」たので、美代子は生徒たちの働き場に赴いた。このような戦況の厳しさの中で、美代子は〈公〉的意識と〈私〉的心情の狭間で葛藤を抱えて奮闘していた。

護りおほせん低学年生徒らわれにあり待避見とどけて子により添ひぬ

壕内にしばらく吾のわたくしの時間あり子を抱きしめてゐる

右の歌は生徒たちを護る使命に働く美代子が、生徒を護るという教育者の役割を優先させた後に、張り詰めた空気の中でわずかな時間を得て当時七歳の次女いづみの母として「子により添ひ」、また「子を抱きしめ」ている様子が詠まれている。美代子にとっては生徒たちも我が子も護らねばならない大切な生命である。緊迫した状況下で、我が娘への愛おしさやすまなさを内に秘めながら、公的責務を第一に考え行動しなければならぬジレンマが、抱きしめるという動作に凝縮されている。

次の歌は学徒勤労動員による工場で任務に就く生徒たちの職場訪問をした折の歌である。

眼に沁みて煙らふ空気学徒らが旋盤の前に日夜吸ふ空気

旋盤によって削られた材料の粉が飛び散る中で働く生徒たちの劣悪な環境に身を置きながら、一方では非常時でなければ学問に勤しんでいたであろう生徒たちのそれぞれの母親の我が子への思いと重ね合わせるよ

うに、当時、名古屋の愛知航空に動員されていたひとみに思いを馳せていたと見て取れる。

#### 四

それでは、教育者としての一面を持つ美代子の戦時下における〈学問への希求〉はどのようなものであったのだろうか。

昭和一八年、戦況の厳しさに国家を挙げて立ち向かっている極限状態の中で、美代子は次の歌を詠んだ。

きびしさの極みの時におほけなし娘に学問を許させたまへ

「おほけなし」いことだと自己のわきまえのなさを押さえたうえで、下の句で、非常時にあつて我が娘に望むのは学問に邁進することであつた。ここには、男子が出征によって学問への道を断念せざるを得ない現実にあつて、銃後を支える女子が男子に代わり学問の道をも支えねばならないという知的役割を託す願望がある。また、美代子は、十代の旗手として『立春』にひとみの作品を掲載し、歌人として将来『立春』の後継者となるべく期待も掛けていた。しかし、美代子にはもっと切実な願いがあつたと見られる。それは、かつて母千代槌によって女学校への進学を阻まれ、自力で検定試験によって資格を取得してきた美代子にとって、ひとみはかつての自己の夢を実現し得る存在だったのである。美代子自身、結婚後も、学究の場に身を置くことを切に望み晩香女学校での教師と東京帝国大学での聴講生とを両立させていたが、ひとみを身籠つたことに気づき一切の社会的活動を断念した。しかし、当時、美代子の心は

自己実現の欲求と母としての責務との間で葛藤していた。それ故、玉谷直實が指摘するように、「自分の生きられなかった影の部分をも子どもが生きてくれること」<sup>(14)</sup>を無意識のうちに求め、ひとみの大阪府立大手前高等女学校及び東京女子高等師範学校や戦後の東京大学受験などのために献身的に応援した。『立春』<sup>(15)</sup>の次の二首には美代子の内的希求が表れている。

学問に心きほへりしその頃のわれを母胎に生命得し吾子  
生れまくの子故やみにしわが希<sup>ねが</sup>その吾子にしも承<sup>つ</sup>継がれなむ

右のことを踏まえると、前述の「きびしさの・・・」の歌の「学問を許させたまへ」という表現の持つ意味は重い。昭和一五年に「をとめなりし日のわが夢につなぐべく子のもつ夢はあらあらしく健やかなり」と詠んだように自己の若い頃と娘の今を連動させ、まるで一体化するかのよう<sup>(16)</sup>に、ひとみの為というよりも一旦諦めた学問への希求が我子に継承されてほしいと、中断した自分自身の夢をひとみに託しているのである。これは、美代子が娘を支配しようとする方向性を持つことを示唆している。

次に、〈報国の徒〉として振る舞うひとみと、〈軍国の母〉として振る舞う美代子の心の葛藤について考察したい。

美代子は昭和一六年、「嵐をこえて」と題する中で次の歌を詠んだ。

中等学生の任務ありといひ切る娘の前に母われの思<sup>おも</sup>ひひさくなりぬ  
男の子生<sup>う</sup>まぬわれにも捧ぐる子ありきと涙あふれ来て道光り見ゆ

前者には、〈報国の徒〉としてきつぱりと振る舞う娘の〈大義〉の前に、吾子の夢や生活を守ろうとする母である私の思いがかすんで感じられたという気持ちを詠んでいる。

教育者である美代子は個人の思いを超えて、当時のいわゆる模範的な〈報国の徒〉を育成すべき場が多々あったと考えられる。教育者という〈公〉的意識の立場で見れば、ひとみもまたそのような軍国教育の申し子のひとりであり、しかも我が子という〈私〉的意識の眼で見れば、いつの間にか親をたしなめるほどに成長した娘であった。凜とした娘の言動の前に、我が子への執着など取るに足りないものになってしまった、と戦時下で〈公〉的意識が〈私〉的意識を凌いだことを詠んでいる。後者の歌は、美代子の戦時詠の中では唯一、国家に生命を捧ぐべく男の子を生んでいない母という立場を直接的に表現した歌である。国策により母の究極の役割は兵士として国に差し出す男の子を生み育てることであった当時、美代子にとって、出征兵士の母という存在にはなり得ないことへの社会的負い目がどれほど強いものとして内在していたかが見て取れる。それ故「男の子生<sup>う</sup>まぬわれにも捧ぐる子ありき」と、娘であっても〈軍国の母〉たる役割を担い得るのだと知った報国の思いを詠んでいる。下の句の表現はまさに戦時下ならではの〈母の歌〉であり、時代の特殊性を物語っている。

しかし一方で、次の歌（昭和一五年）がある。

言<sup>き</sup>潔く涙たへし瞳の深み育て上げし子を捧げむとして  
かくの如深き母の瞳にあひしかば母といふ名をわれに畏るる

『立春』<sup>(16)</sup>には、「同人能崎義夫氏出動。面会を許されし宮庭にてその母



君にも見ゆ」の詞書が添えられている。能崎は当時二一歳の『立春』の同人で、応召兵として出征した。前者には、能崎の母の、「男の子」の母親として、毅然として我が子を戦場に送り出す母親の像を演じようとする心と、「力む息」や「言潔く」と、「涙たたへし瞳の深み」という言葉に込められた本音との葛藤が、対比的に表現されている<sup>(17)</sup>。後者にあるように、その場に立ち会った美代子は、「男の子」の母という立場ゆえに味わねばならない、誇りの陰に秘められた悲痛さや残酷さに翻弄される姿を見て、母という存在の持つ底知れぬ深さと畏れ憚る気持ちを抱いたことが明瞭に表現されている。

美代子の母としての揺らぎの陰で、ひとみもまた二律背反の自己の姿に苦しんでいたのである。

ひとみは十代の旗手として『立春』に作品を掲載していったが、国家の戦時教育に則った〈報国の徒〉としての凛々しい心意気を詠んでいる。(以下、ひとみの歌については『立春』より引用する。)

米国は東京の模型つくり爆撃練習せりとふ我も負けじとモンベぬふ  
手早む

『立春』 第五二記念号 (昭和一七・一一)

敵国米国の戦略を伝え聞き、大国に負けじと勇み立つが、その対比が女性が活動しやすい服装として奨励されていたモンベを縫うという行為であるところに、意外性のある新鮮な感覚が見られる歌であり、戦時下教育が浸透した内地を護る女の典型を表現したと言える。しかし、このような意気軒昂な公的立場がひとみの全てであったわけではない。

「捷報」と題して掲載された中の次の歌は、ひとみをはじめに自分のノート<sup>(18)</sup>に書きつけた時、「本土空襲」と題したものである。

警報のひびきたればすがすがし心のわだかまり皆洗ひ流されぬ

『立春』 第四八号 (昭和一七・六)

「捷報」であるなら、警報の響きも勝利の知らせに繋がるものであり、「すがすがし」という晴れやかな心情を詠んだものと捉えることも可能であろう。しかし、実際には、「本土空襲」の非常時に直面して死の覚悟による、すべてが消え去る緊張や恐怖を呼び起こす響きである。それ故、この歌は、響きわたる空襲警報の音を自己の心理状態に取り込み、迷いを吹き飛ばす爽快な響きに転換する心情の漂う作品と解釈すべきであろう。それほどに、ひとみは当時の自分に対して、表現し難い鬱々としたわだかまりがあったと言える。母の期待を感じながら、社会的にも家庭内でも優れた娘であり続けたひとみではあったが、それだけに内面の御し難い葛藤に自己喪失気味の日々であったひとみの心情の吐露が見て取れる。(ひとみについては別稿で論じる。)

一九四四(昭和一九)年、東京女子高等師範学校に入学したひとみは入学を機に寮生活を始めた。次の歌はその頃詠まれたものである<sup>(19)</sup>。

敵機来襲今か今かとまちうつつ母よりの煎豆あたたかきをだきし  
む

心からまる思ひはねのけ母よりの携帯食料枕にねいらんとす

前者は、上の句で敵機を待ち構えるという「報国の徒」であるひとみの緊張感の高まりを表現し、下の句でそれを和らげる母の温かさがしみじみと表されている。娘が抱きしめる煎豆の温かさは母の温かさでそれ

は守り袋である。後者も同じく、上の句で鬱屈した心情を表し、下の句で、それをはねのけて母よりの命のお守りである携帯食料を枕にして眠りに就こうとする心情を詠んでいる。携帯食料に象徴されるのは、眠りを誘う包み込むような母の優しさである。両者に共通するのは、離れてこそしみじみと知る守護神のような母の愛を主題としている点である。

昭和一九年、ひとみは学徒勤労動員の要員として名古屋の愛知航空機株式会社工場の工場に派遣されることになった。ひとみにとっては母からの心的自立のチャンスであった。戦争末期には雑誌統合により一時期、『立春』と『霸王樹』が統合され統合誌『爽節』（昭和一九年八月～十二月号）となったが、『爽節』（昭和一九・二一）に美代子は「女高師学徒勤労隊出動」<sup>②</sup>と題して五首掲載している。次の歌はそのうちの二首である。

お召うけてをとめ子吾子も私の子にあらなくなぞ瞻らるる  
もぎとりて子がゆきしから生産に仕へまつれり吾の一部も

前者は、学徒動員を天皇からのお召と捉え、〈お召を受けた上はもはや自分とは離れてしまった特別な存在なのに、どうして自分の娘として瞻ることが出来るのか、いや、できない〉と、まさに〈報国の徒〉として公的な使命を自覚した歌である。しかし、美代子の内実は、後者に見るように、娘を取られたことに対して自分の肉体の一部がもぎとられたような肉体的感覚としての強い痛みを感じている。形の上では、下の句で〈娘が行ったので天皇（お国）の生産のためにお仕え申し上げます〉と前者同様の自分の痛みを超えて報国の意が強いことを示しているが、初句に「もぎとりて」を置くことで、この歌全体からは母の強烈な痛みが強く伝わってくる。〈公〉的意識と、自分も娘と一つになって生きた

いと願う娘への強い執着の狭間で、引き裂かれるような心の混乱に何とか折り合いをつけようとしている美代子の苦悩を吐露した歌と言えまいか。娘は母の取り乱しように驚き、本来の母の生き甲斐でもあった「歌びとにかへれ」と言い置いて動員先へと赴いた。まさに美代子には強烈な一言であった。離れてゆく我が子が母に指し示したのは、歌びととしての美代子の根幹に迫る言葉であった。

次の歌は、昭和一九年、我が子が突き放され、我が子が自分の手から飛び立とうとする予感の中で詠まれた歌である。

歌びとにかへれと吾子のいひおきし言葉に生きて雪の道かへる

このように、ひとみは母に強く自立を促し、母から離れようとした。一時的ではあるが、娘が我が子に執着する母を支配し、母がよりよく生きる方向性をきっぱりと指し示したことが見て取れる。戦時下で交差する〈母と娘〉、これはひとみが母の呪縛から抜け出す機会であったが、美代子は、他者として出発することも抜け出すことも容易ではなかった。茂によると、美代子は娘の動員後、「心臓の発作のようなもの」を起し、出勤中のひとみに電報を打ち呼び寄せたが、娘に会った途端、元氣になったという異常な精神状態に陥った。

ここには、慈悲深く保護する母ではなく、深淵に臨んで自失して揺れ動く母の姿がある。子離れできない美代子は、娘への献身の強さが実は自己の不安からくる依存と表裏一体であることに気付かぬまま、混乱に陥ったと考えられる。茂によると、「美代子の母親の時もそうでございましたけれど、美代子が大阪から帰ってくるとけろりと治ってしま」<sup>③</sup>ったという。この〈母と娘〉の濃密な関係性が、やがてひとみを覆う翳と

なつて自死へと追いつめてゆく一因になったのではなからうか。その予兆がすでに、戦時下の〈母の歌〉に見て取れる。

かつて美代子は母千代槌に取り込まれようとしたが、この関係が時代を超えて美代子とひとみの二代に亘って繰り返される一方向の関係へと繋がっており、深層心理のウロボロスの円環として捉えることができる。

このように戦時下における〈母の歌〉をたどることで、美代子の戦時下の〈母の歌〉の内実が顕在化した。戦時下においても、けっして、戦意高揚のための母という役割のものでも、近代の母性愛観的なものでもないことが明らかになった。美代子は戦時下にあつて、国家や民族を超えて無辜の生命を脅かす戦争への懐疑の歌を世に出した。また、戦時下という時代の枠組みの中で、〈公〉的役割と我が子への愛着という〈私〉的心情との齟齬を抱えて苦悩しながら、行きつ戻りつして生きた歌人である。時には〈報国の徒〉として毅然としてふるまう娘の前で、私的な自己の願望は矮小化されるが、時には娘との一体化という自己の願望を強烈に押し出す母でもある。また、母という存在の究極の役割が、国家に兵力として差し出す男子を生み育てることにある男性中心主義社会の中で、〈報国の徒〉として振る舞う娘を評価し、擬似的に「軍国の母」たろうとする「男の子」を持たぬ戦時下の母の、屈折した心情がより娘への密着感へと傾斜してゆくのは、戦時下ゆえに顕在化した〈母の歌〉の特色である。

〈母と娘〉は、〈戦時下の母〉と〈報国の徒〉という立場で交差し、互いに自立の機会を得たかに見えたが、娘から分離できない母は、自己の内部の葛藤を処理しきれず、現実を受け入れられないままに無意識のうちに娘に再び依存することとなった。明日の生命の保証のない戦時下と

いう異常な時世が心身に拍車をかけて複雑化した心情を浮き彫りにしたのが、戦時下における美代子の〈母の歌〉である。

### おわりに

以上、戦時下における美代子の歌には、〈公〉的気意識と〈私〉的心情という二重構造の狭間で揺れ動く心を抱えながら、その二律背反的葛藤の精神世界をそのまま表現した歌人の強い意志が働いている。美代子は言論が統制された時代にあつて、やむにやまれぬ内奥の声を真摯に歌にした歌人であつた。その根底には戦争への懐疑や怯えを直観するだけの感受性があり、それが時流を超えた普遍的な歌をも生み出すことができたのではなからうか。また、我が子を守り通そうとする母の強い意志の背後には、戦時下という生命の保証のない時代に生きるがゆえの自己実現への強い願望が見て取れる。近代社会の先陣を切って生きようとする母の自我意識の強さは、娘が自立を果たそうとすると自分からの分離を拒み、娘を支配しようとする激しい葛藤を抱え持つ歌群を演出した。そして、時代の制約に抵抗して時代の先端を拓こうと心血を注ぎ格闘するなかで、社会規範に抵抗すべきエネルギーの方向は時に内に向き、〈母と娘〉の連鎖の中に取り込んでしまおうとする。この関係が戦時下という非常時の生活体験をくぐることによってより明瞭になった。近代の母性愛観では覆いきれない美代子の内奥の声の表出が持つ意義は大きい。それゆえ時代を超えて美代子の〈母の歌〉は評価されるべき歌群であると言ひ得る。

この両者の戦時下での体験が戦後の生き方にどのように繋がっていく

のであろうか。長女ひとみは、戦時下に培われた〈報国の徒〉としての生き方から戦後民主主義の洗礼をどのように受容し、また、戦後女性の道を切り拓こうとする学校教育者としての母のモデルたり得る道を歩みだしたのであろうか。〈母と娘〉の関係性がひとみの自死にどのような関わって行くのであろうか。敗戦直後のひとみの死に至る過程を考察するにあたって、本稿で論じた戦時中の生き方を無視することはできないと考える。

## 注

(1) 『丘の上』が戦後刊行されたことから美代子の戦時詠に対する戦後の視点からの編纂意図を無視できないが、これについては別稿に譲ることとする。

(2) 美代子の母千代槌が創設した女学校。千代槌は明治女学校の第二回卒業生である。千代槌はキリスト教の精神に則った明治女学校の教育に深い感銘を受け、一八九〇年に普通科を卒業した後、数学の助教師として残り廃校（一九一〇年）まで勤めた。廃校後、一九一九年に、自ら北豊島郡栗鴨町二丁目四二番地に晩香女学校を設立して女子教育に身を投じた。後に、杉並区堀ノ内二丁目四一五番地に転居したが、一九四三年の死去まで校長を務めた。

(3) 小山静子『良妻賢母という規範』、勁草書房、一九九一・二〇

(4) 近代の母性愛観について、沢山美果子は「近代日本における「母性」の強調とその意味」人間文化研究会編『女性と文化―社会・母性・歴史―』、白馬出版、一九七九・一二で、大正期に意味を持ち、昭和期に定着した「母性」という語の背景を次のように述べている。

「母性」という言葉は、エレン・ケイの用いたスウェーデン語の *moderskap*（英語の *motherhood* 母であること。maternity 母になること、母らしさ。ドイツ語の *mutterlichkeit* 母たる、母らしいこと。母の愛にあたる言葉）の翻訳語として登場したものと推測される。（中略）「母性」というのは、子どもを産み、哺乳し得るという女性の身体的特徴から出てくる、子を愛する

心、子のためにつくす心だととらえられた。（中略）良妻賢母の模範たる中間層の女子の職業婦人化は、良妻賢母からの脱皮として問題にされたのであった。「母性」の強調は、こうした事態への一つの対応であったと考えられる。

また、加納実紀代は「母性」の誕生と天皇制」新編『日本のフェミニズム』5「母性」、岩波書店、二〇〇九・四で、「母性」という語を初めて使ったのは、与謝野晶子の「母性偏重を排す」ではないか、「少なくとも、普及のきっかけになったのはたしかである」と、指摘した。当初は、母権、母態と訳されていたが、その二年後には平塚らいてうとの母性保護論争が始まり、以後、「母性」という言葉が多くの論者に使われたという。

(5) 当時、エゴイズムを切り口として使った評論が一つの流れとしてあったが、今後、検討の余地を残している。

(6) 吉尾なつ子『軍神の母』、三崎書房、一九四二・七

(7) 五島茂『海図』、甲鳥書林、一九四〇・一二

(8) 既成歌壇の変革を試みて活動していた頃の自己の思想を指すと考えられる。

(9) 千代槌と美代子との母娘関係については、拙稿「五島美代子第一歌集『暖流』——〈母の歌〉をめぐる——」『日本女子大学大学院文学研究科紀要第二〇号』日本女子大学 二〇一四・三を参照されたい。

(10) 近藤芳美「丘の上」を讀みて——五島美代子小論『近藤芳美集』第六卷、岩波書店、二〇〇〇・五。文章最後に（一九四八・八）とあるが、初出は未詳。

(11) 『立春』三九九号（一九八四・一二）

(12) 丘の上にあった晩香女学校の所在地を指す。

(13) 「戦時下の歌——昭和59・10・7 東京立春短歌会にて講和——」『立春』三九九号（一九八四・一二）

(14) 玉谷直實「女性の自己実現と母性」馬場謙一 福島章等編『日本人の深層分析（一）』、『有斐閣』、一九八四・一〇

(15) 『立春』第六四号（一九四三・一二）

(16) 『立春』第二七号（一九四〇・九）

(17) 当時、〈軍国の母〉の立場に立たされた母たちは、能崎の母と同様の葛藤の中



にいたのであろう。例えば、若山貴志子は「はじめより我を侮りしけどものの国アメリカぞ撃ちて撃ちてつぶせ」（補遺）若山旅人編『若山貴志子全歌集』、短歌新聞社、一九八一・七）などと戦意高揚を激しく詠んでいるが、一方、次男富士人が一九四三年、学徒動員にて出征した際に、「二十三歳になる富士人、近く海軍兵に召されて征くに」の詞書を持つ次の歌を詠んだ。これは戦後、「補遺」として若山旅人によって前出の『若山貴志子全歌集』に掲載されたものである。

母なれば抱くに何の憚りのあらんぞいざと思ひつつ日を経る

ここには、出征に際して我が子を抱きしめたいと心では勇ましく思うが、「いざ」と思いつつ現実には行動に移せないまま日が過ぎてゆく〈軍国の母〉のもどかしさを託つ心情が詠まれている。

- (18) 「五島ひとみ歌集一九三四年——一九五〇年」『立春』第七六号（一九五〇・八）
- (19) 「五島ひとみ歌集一九三四年——一九五〇年」『立春』第七六号（一九五〇・八）
- (20) 「女高師学徒勤労隊出動」『爽節』第二六卷第一〇号（一九四四・一一）
- (21) 「五島美代子略年譜」『定本五島美代子全歌集』、短歌新聞社、一九八三・四
- (22) 五島茂「敗戦のうた（五島美代子作品）」『立春』第四〇一号（一九八五・二）

\* 固有名詞以外の旧字体は新字体に改めた。

\* 本稿での歌の引用は『定本五島美代子全歌集』（短歌新聞社、一九八三・四）による。それ以外の引用については出典を記した。

（日本文学専攻 博士課程後期三年）

西暦(昭和)	美代子年齢	時勢	美代子及び家族の動勢	美代子・茂刊行物
一九二六 (一)	二七―二八	二月労働農民党創立。	四月長女ひとみ誕生。美代子、東京大学聴講生も晩香女学校教諭も辞す。(大正一五年)	七月茂「転換期のアララギ」(『短歌雑誌』(大正一五年))
一九二七 (二)	二八―二九	金融恐慌		
一九二八 (三)	二九―三〇	六月治安維持法改正。 七月特別高等警察、全国に設置。	九月茂、前川佐美雄たちと「新興歌人連盟」結成。 美代子、新興歌人連盟に加盟。『心の花』脱退。	二月―一二月茂「短歌革命の進展」(『短歌雑誌』)
一九二九 (四)	三〇―三一	七月プロレタリア歌人同盟結成。 一〇月ニューヨーク株大暴落、世界恐慌に発展。	四月茂、大阪商科大学(現大阪市立大学)に赴任、家族は茨田郡守口町(現大阪府森口市)に居住、作歌を断念。美代子、プロレタリア歌人同盟加盟、脱退。作歌を断念。	三月茂・美代子、前川佐美雄と共に歌誌『尖端』創刊(八月廃刊)。八月茂『石樽茂集』(日本評論社)刊行。
一九三〇 (五)	三一―三二	昭和恐慌の始まり。		
一九三一 (六)	三二―三三	九月満州事変勃発、一五年戦争に突入。	茂留学のため家族で渡英、主に大英博物館にて資料収集。ひとみ(四歳)、フレーベル教育研究所付属幼稚園入園。	
一九三二 (七)	三三―三四	一月プロレタリア歌人同盟解散。 三月「大阪国防婦人会」発会。	夏は家族でロバート・オウエンの故郷ウェールズのニュータウンに棲み、九月、スコットランドを経て帰イングリランド。	
一九三三 (八)	三四―三五	三月日本国際連盟脱退を通告。ナチスの台頭。	七月ドイツ、フランス、スイス、イタリアを経て帰国。『心の花』に復帰。ひとみ小学校一年。	

一九三四 (九)	三五―三六	八月A・ヒトラー「総統」に就任。	四月ひとみ大阪府立女子師範付属小学校二年編入。	
一九三五 (一〇)	三六―三七		七月美代子の父清太郎死去。	九月石樽茂『現代人のための短歌の作り方』(三省堂)刊行。
一九三六 (一一)	三七―三八	二月二・二六事件勃発。 十一月日独防共協定調印。		七月美代子第一歌集『暖流』(三省堂)刊行。
一九三七 (一二)	三八―三九	九月日中戦争開始。 十一月日独伊防共協定調印。	五月次女いづみ誕生。	
一九三八 (一三)	三九―四〇	三月国家総動員法制定、三月、ドイツがオーストリア併合		七月歌誌『立春』創刊。
一九三九 (一四)	四〇―四一	七月国民徴用令発令 九月第二次世界大戦開始。	四月ひとみ大阪府立大手前高等女学校入学。	
一九四〇 (一五)	四一―四二	九月日独伊三国同盟調印。 一〇月大政翼賛会発足。		七月美代子「朝やけ」(『新風十人』所収、八雲書林)刊行、同月「五島美代子編」(『現代短歌叢書』第九卷弘文堂)刊行。美代子『赤道圏』(甲鳥書林)刊行。 一二月茂第二歌集『海図』(『昭和歌人叢書』甲鳥書林)刊行。
一九四一 (一六)	四二―四三	四月日ソ中立条約調印、米の配給制開始。 一二月アジア太平洋戦争開戦。		

一九四二 (一七)	四三―四四	二月大日本婦人会結成。 四月ドーリットル空襲。 六月「日本文学報国会」結成。	八月茂の父石樽千亦（『心の花』編集者）死去。	二月美代子『一年』（『現代女流新鋭集』第五輯、日本短歌社出版部） 一〇月美代子（『婦人のための短歌のつくり方』船場書店）刊行。
一九四三 (一八)	四四―四五	一〇月学徒出陣、「出陣学徒壮行会」開催。	三月美代子の母千代槌（晩香女学校校長）死去。 美代子晩香女学校校長に就任。晩香女学校内に居住。茂校主として美代子を助ける。	
一九四四 (一九)	四五―四六	八月学徒勤労令、女子挺身勤労令公布。戦略爆撃による日本本土大空襲	四月ひとみ東京女子高等師範学校文科入学、寄宿舎入寮。 七月茂大阪商科大学辞職、東京移住。 八月茂綿スフ統制会勤務。 八月『立春』は戦時歌誌統合により『霸王樹』と合併。	八月『霸王樹』創刊（一二月）
一九四五 (二〇)	四六―四七	三月東京大空襲八月広島・長崎原爆投下、ポツダム宣言受諾、敗戦。 一二月労働組合法公布。婦人参政権成立。	一月ひとみ学徒勤労動員により名古屋の愛知航空に赴く。	八月一六日の詠草をガリ版刷り。
一九四六 (二一)	四七―四八	九月労働関係調整法公布。 一一月日本国憲法公布。男女平等が憲法で保障。		五月『立春』再刊第一号（通算六七号）刊行。
一九四七 (二二)	四八―四九	三月教育基本法公布。 四月労働基準法公布。 五月日本国憲法施行。	四月茂専修大学教授就任。	



一九四八 (二三)	四九―五〇	教育防衛復興闘争が全国展開し、「全学連」結成。	三月長女ひとみ東京女子高等師範学校卒業。 三月茂皇太子（現平成天皇）の作歌指導の任に就く。 四月長女ひとみ東京大学文学部入学、美代子東京大学聴講生。	四月美代子第二歌集『丘の上』刊行。
一九四九 (二四)	五〇―五一		四月美代子東京大学研究生、専修大学講師。 八月茂経済学博士の学位授与。	九月美代子、北見志保子、長沢美津等と共に『女人短歌』創刊。
一九五〇 (二五)	五一―五二	六月朝鮮戦争開戦。	一月長女ひとみ急逝。 三月晚香女学校廃校。 四月美代子専修大学教授就任（昭和四三年三月）、次女いづみ学習院中等科入学。	一〇月美代子第四歌集『風』（女人短歌会）刊行。（*第三歌集『炎と雪』（立春短歌会）は昭和二七年三月刊行）。

Miyoko Goto and “Mother Poems” During the Showa War Years:  
A Discussion of the Second Collection of *Tanka* Poems, *Oka no ue*

HAMADA Mieko

[Abstract] The *tanka* poet Miyoko Goto (1898-1978) has gone down in the history of literature as the poet of the mother and of maternal love. However, the “Mother Poems” in *tanka* form that she wrote during the war years had by no means anything to do with the mother as used to whip up fighting spirit nor to do with the myth that places maternal love as an instinctive love of the mother for her child, there is something beyond.

Miyoko gave to the world *tanka* poems that transcended nation and the people of Japan to express skepticism about war as a menace to innocent life. She also placed value on the daughter who behaved as a “party to patriotism.” Thus Miyoko, as the mother of the war years who had no male child, tried to simulate the role of Mother of Militant Japan. Such warped state of mind of hers ended up inclining rather toward a feeling of closeness to the daughter.  
The “Mother and Daughter” intersected with the perspectives of “the Mother of the War Years” and “the Party to Patriotism,” and though these seem on occasions to be mutually independent; however in reality the mother is unable to separate from her daughter and unable to finally deal with the conflict within herself, so that she

unconsciously ends up dependent on the daughter again. It is a distinctive characteristic of Miyoko's "Mother Poems" during the war years that they expose how the abnormality of wartime gives impetus to that state of mind and complicates it, and that this emerges in her poems because it was wartime.

The *tanka* poems Miyoko composed during the war years convey a heart and mind moved one way and then another in the duality of the "Public" awareness of her duties as headmistress of the Banko Girls' School, on the one hand; and her "Private" state of mind. At the same time, the poems depict the strong will of the *tanka* poet who unflinchingly expressed the psychology of that conflict between mutually contradictory aspects. Miyoko was a poet who, precisely because she was living in a time when speech was not free, could not help but make poems that speak frankly with her inmost voice. One might infer that at their very root was a sensibility capable of directly perceiving skepticism toward the war and fear of it, and that this was what enabled her to produce *tanka* poems of a universality that transcended those times. The strength of selfhood in the mother who sought to live at the very leading edge of Japan as a modern society dominated the daughter, denied the separation from herself of the daughter who sought to become independent, and so formed this body of *tanka* poetry that is informed with this intense conflict. In a struggle that was leading the way toward the future, the energy required to resist society's norms was at times directed into herself, and she tried to assimilate her daughter into the associative linking

expressed as "Mother and Daughter." This relationship took on greater clarity because it made its way through the experience of life in the emergencies of wartime. The voice emerging from Miyoko's inmost self cannot be accounted for entirely as the maternal love of the modern age, and it is a voice of great significance. This is why Miyoko's "Mother Poems" transcend their era as a body of *tanka* poetry that is worthy of value.

[Keywords] Miyoko Goto, *Oka no ue*, *Risshun*, "Mother Poems" of the war years, "Mother and Daughter"